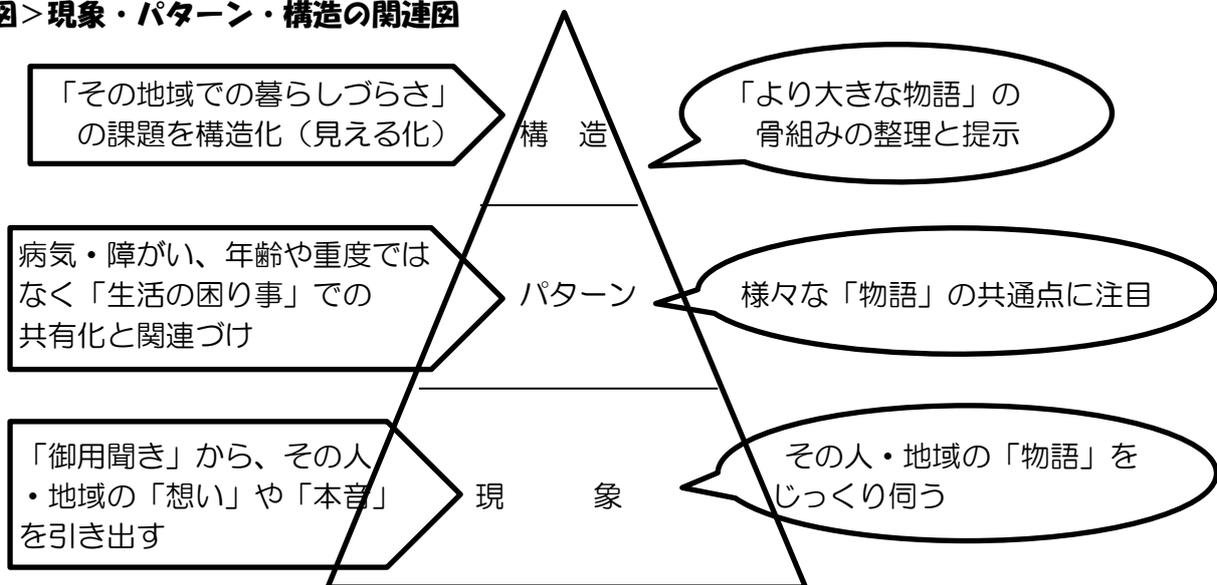


◆地域福祉実践とナラティブ・アプローチ –「御用聞き」という「無知の姿勢」–

1. 住民主体の地域づくりへの展開に向けて

- 地域ケア会議を「各地域の実情に基づいて」行うためには、「御用聞き」という「無知の姿勢」に基づく実情把握が不可欠になる。また、「地域づくりの展開のプロセス」を住民と専門家・行政が協働して作りあげていくためには、まず「その地域の専門家」である住民自身の語り（ナラティブ）にじっくり耳を傾け、時には住民自身も気づいていない「予想していなかった例外的な特徴」を探り出し、そこに着目する必要がある。すると、住民たちだけでは膠着していた地域課題が、第三者の介入によって光が当てられ、別の視点が入ることで、課題解決に向けた動きが始まる。
- そのような「動的プロセス」に地域ケア会議がなるのであれば、住民たちは、自らの語り（ナラティブ）に基づいた会議であり、かつ自分たちだけでは動かなかった地域課題の解決に向けて協働が始まるという意味で、その会議に関わる「ワクワク度」や「希望」が見出され、「自分事」としてその会議に参加する。そして、その「自分事」としての「参画」こそが、「住民主体の地域づくり」のために必要不可欠な要素である。
- まかり間違っても、専門家が「指導・アドバイス」という形で、「上から目線」で「巻き込んで」も、住民たちは決して主体的には参画しない。いつものように、行政から頼まれた会議に渋々付き合うモード以上には、展開しない。
- 大切なのは、「その地域の専門家」としての住民の力を信じること、専門職や行政が自らの「専門性」を脇に置いて「無知の姿勢」でその声にじっくり耳を傾けること、そして両者が語り合う中で、お互いが自分事として「例外的な特徴」を見つけ出し、そのパターンを析出する中で全体構造を炙り出し（その地域全体の課題の構造図を整理し）、それを解決する糸口を一緒に見つけていくことである。その際は常に、「これってどうゆうことか?」「なぜそうなるのか?」と問いかけ合いながら、お互いが納得できる整理を見出していく。このようなプロセスからしか、現場で発見された「事件」は解決には向かわない。このようなプロセスは、「現象→パターン→構造」の整理の醍醐味ともいえる。

<図>現象・パターン・構造の関連図



- 各地区に専門職が「御用聞き」に行き、様々な声を拾い上げながら、他の地区でも同様な声はないか聞き取りする中で、やがて病気や障がい、重度といったカテゴリーではなく、「生活の困り事」で何らかの共有化や関連づけの糸口が見えてくる。それをパターンとして整理し、さらにはそれらのパターンの関係性を整理する中で、「その地域での暮らしづらさ」の課題を構造化（見える化）することが可能となる。
ミクロの個別の声を、地域課題に変換し、そこからマクロの自治体政策として受け止めるという意味で、ミクロからマクロへの、個別課題から地域課題への変換こそ、「御用聞き」に求められる「専門性」だと言える。

2. 「御用聞き」という「無知の姿勢」

- 住民主体の地域づくりの展開を考えるには、地域住民の実感に基づいた声（ニーズ）を拾い集める必要がある。より生活に身近な圏域で行われる「小地域ケア会議」で出た・地区担当の専門職が把握していた「地域課題」がどうも表面的であり、その地域の「本当の課題」とは言えない「表層的なニーズ」のように思えた。そこで、本当のニーズを掘り下げるためにどうしたらいいかを考えていて浮かんだのが、漫画サザエさんに出てくる「三河屋のサブちゃん」である。
- サブちゃんの「御用聞き」の姿勢が、専門職によるアセスメントやヒアリングとどう違うのかについて、「無知の姿勢」という言葉が補助線になりそうだ。対象者や対象地域の「物語（＝ナラティブ）」に着目する「ナラティブ・ソーシャルワーク」のなかでは、次のように述べられている。
- この「無知の姿勢」は、ナラティブ・アプローチにおいて、いまだに語られていないナラティブを引き出すために必要な支援者の態度です。しかし、この言葉は、支援者が有する知識や技術・倫理などの「専門性」とは真っ向から対立する考え方です。ナラティブ・アプローチでは、無知の姿勢に立つことで、自らの専門性も否定します。そして、「クライアントこそ専門家である」という立場から支援を行います。そのような支援は、もはや従来の「支援」とは異質なものです。それは、支援者の純粋な好奇心にもとづいた態度であり、クライアントのナラティブをもっと知りたいという欲求です。「無知の姿勢」による支援は、もはや困っている当事者を助けるという、支援者が優勢な立場を確保するという支援ではありません。
- ここで述べられている「無知の姿勢」とは、『「クライアントこそ専門家である』という立場から行う』ことを重視する姿勢である。保健師や社会福祉士、介護支援専門員などの「専門性」をいったん脇に置いて、「クライアント（＝住民）」に「教えてあげる」という姿勢と決別することを意味する。住民の語る内容（＝クライアントのナラティブ）を「もっと知りたいという欲求」を持ち、この地域の実情を知っているのは、専門家の私ではなく、住民あなたであるという視点から「住民の専門性」を重視し、「無知の姿勢」でじっくり住民の話（ナラティブ）を伺う。これは、三河屋のサブちゃんと重なる視点である。
- 「支援者の純粋な好奇心にもとづいた」「教えてください」というアプローチでは、これまでの巡回訪問や行政が依頼した会議などでは出てこない本音が出てきたことが報告される。このことは、「ナラティブ・ソーシャルワーク」のなかで、次のように述べられている。
- 無自覚な先入観は、支援の方向性を知らず知らずのうちに歪めるため、とても厄介なものです。そのためナラティブ・アプローチでは、クライアントに対する支援者の思い込みや先入観を可能な限り排除していくことが重要になります。そこで求められる方法は、クライアントの予測していなかった例外的な特徴に注意を払うことです。こうした例外に注目することは、支援者自身の思い込みや偏見をあぶりだし、そこから解放された自由な視点でクライアントを深く理解することを可能にします。
- 専門職は日常的に「見立て」を行って、個人なり地域に介入していく。だがその「見立て」は、実は「わかったふり」をしているだけの「無自覚な先入観」である。これに対し、専門職による「無知の姿勢」にもとづく「対話」の中から出てきた住民の偽らざる実感は、住民と支援者の協働構築の「物語（＝ナラティブ）」である。だからこそ、その「物語」の担い手である住民と支援者が一緒に「地域の物語」をつくったり、書き変えたり、守っていくことには、住民は「主体的に参加」したいのである。この点を忘れてはならない。
- 「御用聞き」は、相手の「言いなり」に動けばいいのではない。住民の声を「無知の姿勢」で伺ったうえで、それをどうアセスメントし、優先順位づけを行いながら、具体的なアクションにつなげるのかにこそ「専門性」が求められるのである。住民が日常的な会話を通じて表現する様々な思いや本音を受け止め、その「表現されたニーズ」の背景にどのような要因があるのかを分析するのが、アセスメントの基本である。そのうえで、優先順位をつけながら様々な声を整理・編集していく必要がある。そして、「御用聞き」のなかから出てきた「その地域の課題」として整理し、それを住民と共有し、自助・互助・共助・公助のそれぞれの役割分担とアクションプランづくりに落とし込んでいく必要がある。「事件は現場で起きている」。その「現場」において「先入観や思い込み」を排し、「何が起きているのか」を正確に掴むための「無知の姿勢」が大切なのである。